

# 実践女子大学本『紫式部集』の現状、その他

——その擦り消し痕・『紫式部集大成』拾遺など——

横 井 孝

## 一 『紫式部集大成』周辺

本年（二〇〇八年）五月、廣田收・久保田孝夫の両氏と『紫式部集大成』（実践女子大学本／瑞光寺本／陽明文庫本）（笠間書院刊）という一書を編んだ（以下、両氏を含めた諸氏の敬称を略す）。

「大成」とはおおきな称ではあるが、表題に添えられた伝本名にあらわされるように『紫式部集』の定家本系統と古本系統の主要伝本をならべ、それぞれの影印・翻刻・解題・関連資料を集成した内容から、出版社がつけてくれた書名である。右のほかに「基礎的研究」と題して紫式部のほかの作品——物語・日記との関連、そして当該家集自

体の基本的問題を説いた解説論文を掲載し、おもに久保田による労作「紫式部・紫式部集研究年表」を巻末においた。共編者の廣田・久保田の二人は、南波浩の講筵に列した人たちであり、南波は周知のとおり、『紫式部集』研究の泰斗である。南波には、

『紫式部集の研究』（校異篇／伝本研究篇）（笠間書院、一九七二年九月刊）

『紫式部集・陽明文庫蔵』（笠間影印叢刊、一九七二年九月刊）

『紫式部集（付大式三位集・藤原惟規集）』（岩波文庫、一九七三年一〇月刊）

『紫式部集全評釈』（笠間書院、一九八三年六月刊）  
という、校本・注釈・影印資料・簡便なテキストと各種の

形態をとりそろえた重厚な著述群が後進を導いている。とくに、諸本研究に関しては寥々たる状況だった一九七〇年代に、三類三八種の伝本を集成した校本を作成したことは、いまにしても特筆すべきことと評価しなければならない。

その「あとがき」に、

このような作業のつねとして、けっして完全性は望みえず、今後、新しい伝本資料の発見とともに、どしどし更新されてゆかねばならない性質のものである。

といい、また、

この作業は「紫式部集」研究の基礎作業にすぎず、なお、つづいて「研究篇」「評釈篇」のまとめにかからねばならない。

ともあった。ここにいう「評釈篇」は、のちに南波自身の手によって、現在でも最も浩瀚な注釈書『紫式部集全評釈』（A5判七七〇頁）が上梓されたし、南波の没後に久保田孝夫・廣田収・原田敦子らによって『紫式部の方法——源氏物語・紫式部集・紫式部日記』（笠間書院、二〇〇二年一月刊）が編まれ、南波のいうところの「研究篇」とは異なるものかもしれないが、諸家の著作を結集して実現している。南波の庶幾した著述は、かくのごとく、あらかた形をなしているかに見える。しかし、南波自身がいつていたように、研究というものは「けっして完全性は

望みえず」、「どしどし更新されてゆかねばならない性質のものである」はずなのだ。

まず、岩波文庫によって普及した本文は、その凡例に記されているように、

実践女子大学本は、現存伝本中の最善本であるが、諸本と校合の結果、現形一二六首のほかに、あつて然るべき歌として二首を追補し、一二八首としたもの<sup>注1</sup>

であった。つまり、岩波文庫本本文に依拠しながらも「実践女子大学本による」というような引用のしかたは誤解をまねく、ということなのだ。「あつて然るべき歌として二首を追補」という南波の判断は、それはそれとして尊重すべき研究の成果ではあるが、研究の一階梯としてその判断を検証するために、実践女子大学本のあるがままの形を示しておかねばならない。それと同時に、実践女子大学本を<sup>注2</sup>認知するまえに南波が定家本の善本と評価した瑞光寺本もまた、未公開の状態がつづいていた。さらに古本系の代表本文としての陽明文庫本は、一九七二年に笠間影印叢刊の一冊として公刊されていたが、虫損部分などの陰翳を抹消したポジ写真でしかなかったため、読みにくい個所が少なくなかったのである。これらの主要と目される諸伝本を高<sup>注1</sup>精細で撮影し直し、翻刻・書誌解題・古地図などの周辺資料・研究文献一覧などの基礎資料を一書にまとめ、『紫式

部集』研究の進展の一助としたい。——そうした意図を理解していただいたのであろう、各伝本の所蔵者のご厚意のもと、すべてあらたに撮影し直した鮮明な画像によって、主要三伝本の全貌を一覧することができるようになった。

しかし、「大成」と称するにはやや慚愧の念をおぼえるところがないわけでもない。たとえば、第一部・諸本影印篇において掲載すべく予定していたいくつかの伝本などを欠く点、もともと第四部として予定していた語彙総索引を見送った点、第五部・諸資料は図版篇とも称すべき多彩な図像・資料を付載したかったものの、さまざまな理由で果たせなかった点があり、積み残した課題はすくなくない。遺憾とするものである。

## 二 実践女子大学本の擦り消し痕

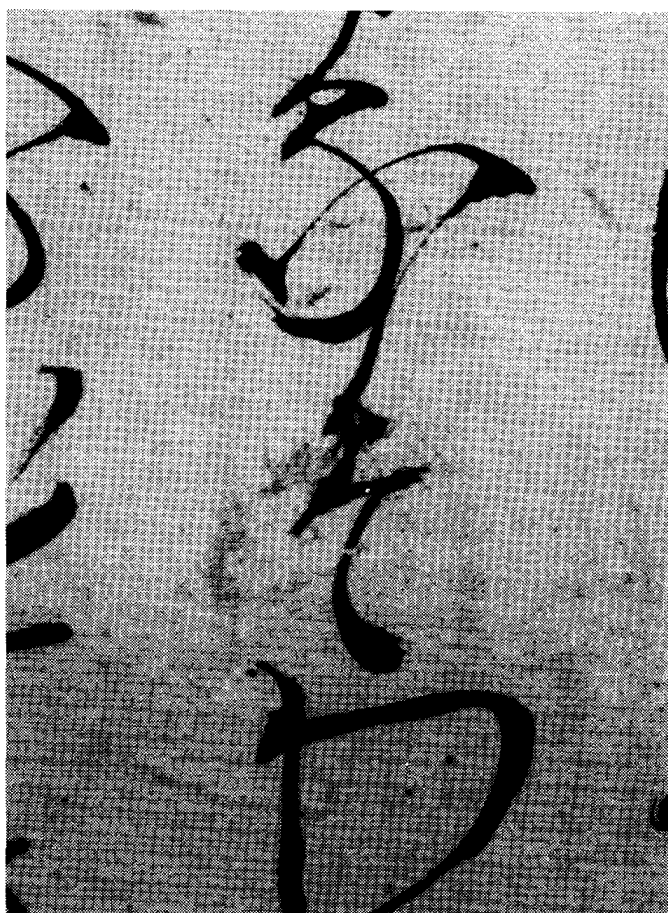
『紫式部集大成』中、稿者・横井の担当箇所に限っていえば、これはまたずいぶん不十分なもので、第三部・解題篇「『紫式部集』実践女子大学本と瑞光寺本」は旧稿<sup>注3</sup>に加筆をほどこしたものにほかならない。とくに実践女子大学本の奥書の「天文廿五年」の表記にかかわる部分は、いまだ解決をみていないものとして省略してしまったため、解題として中途半端なものになった点は遺憾としかいいよう

がない。ただし、今回は鮮明な印影を収録できたので、擦り消しなどの本文の状況をかなり克明に伝えることができたとと思う。あらためて諸賢の検証をお願いしたい。

なお、影印を補って「実践女子大学本の現状」について、擦り消し痕・汚損などの留意すべき点のいくつかを確認した箇所から報告しておこう。所在については、丁数・行数は影印のそれをあげ、カッコ内の頁数・上下段・行数は翻刻のそれを掲げた。なお、傍記などについては、上記の解題にふれているのでほぼ省略する。

- (1) 二オ4行（一九三頁下14行）「なるそわひしき」……「そ」字、擦り消しの繊維が荒れた上に書いたため、「そ（字母・曾）」の一筆目・二筆目あたりが擦れている。その様相を次に拡大して示しておこう〔写真1〕。
- (2) 二ウ6行（一九四頁上11行）「かへし」……「か」字は、擦り消しの上に書いたため、「か（字母・加）」の一筆目が擦れている。「し」の左上部には墨の汚損がある。
- (3) 三ウ6行（一九四頁下8行）「をるをにく／みて」……「に」全部と「く」の上部に擦り消し痕。「にく」の下に「みて」字の墨痕が見えている。いったん「…をるをみて」と書いたのち、書写者自身が目移りに気づいて「…をるをにく／みて」と修正したもので

〔写真1〕 実践女子大学本・二才4の擦れ



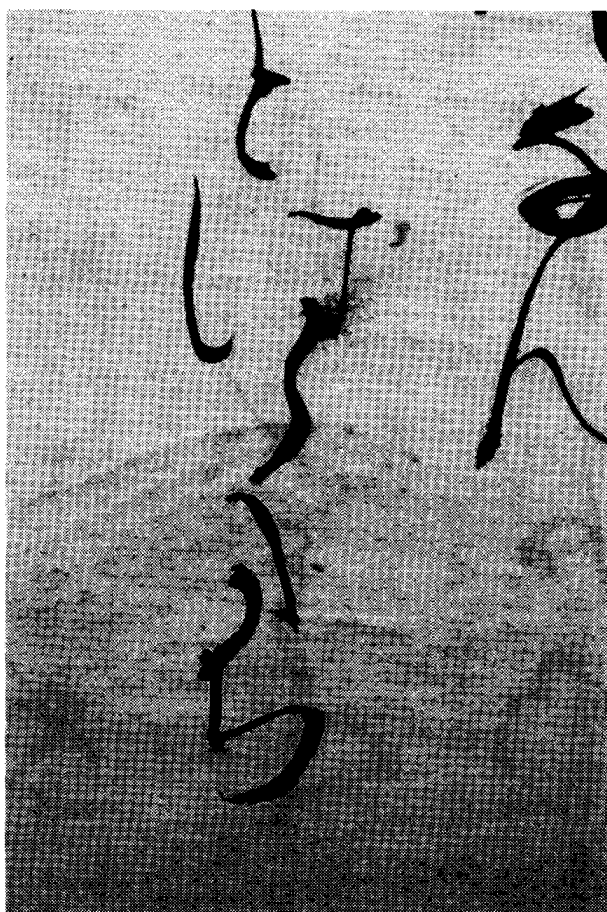
あろう。

- (4) 八ウ5行（一九六頁下15行）「はらたち」……  
「は」字と「ら」字の間に手ズレらしき汚損がある  
〔写真2〕。

- (5) 一〇ウ10行（一九七頁下14行）「女のみにくき」……  
「女」「の」の字間、手ズレの汚損か。あるいはそこに  
虫損が重なっているか。当該の二字の周囲にも墨痕が  
ある〔写真3〕。

- (6) 一三才8行（一九八頁下16行）「おもはすなり」……

〔写真2〕 八ウ5行末の手ズレ

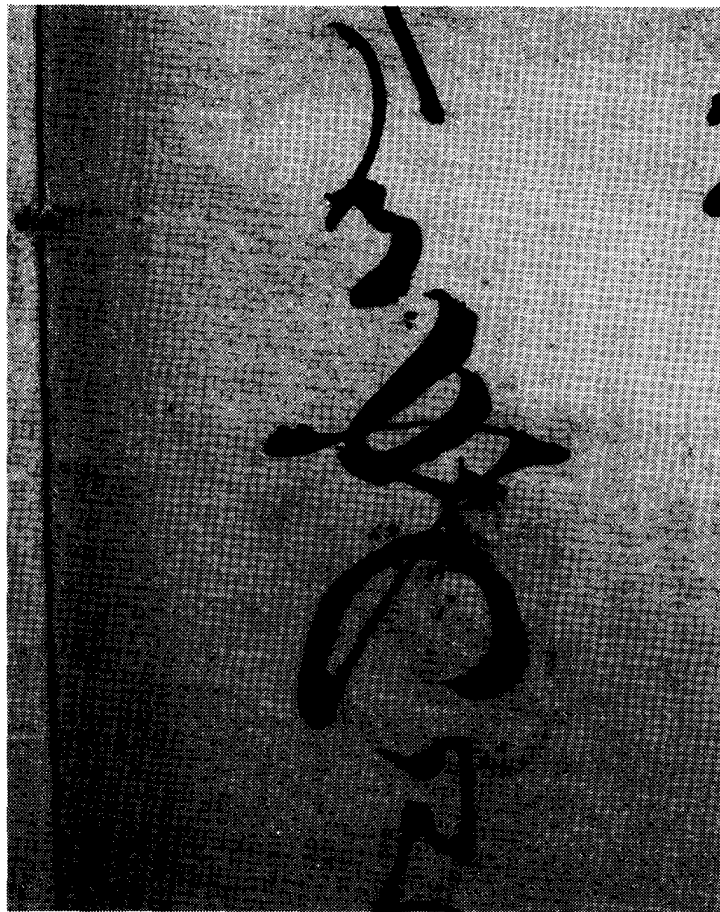


「な」字上部擦り消しの上に書く。「り」の二筆目は重  
ね書き。

- (7) 一三ウ1行（一九八頁下19行）「かすならぬ」……  
「ら」字の一筆目に擦り消し痕あるか。

- (8) 一三ウ5行（一九六頁下23行）「はしめて」……  
「て（字母・天）」の一筆目に線が割れて見えるのは、  
重ね書きするか。あるいは筆の穂先割れか。

- (9) 一四ウ9行（一九九頁下1行）「思うしぬへき」……  
右傍書「そ」とミセケチ符号は墨色薄く、あきらかな  
別筆。



〔写真3〕一〇ウ10の汚損

- (10) 二三才6行(二〇三頁上7行)「ほそとの」……  
 「そ」字、擦り消しの上に書く。
- (11) 二五才10行(二〇四頁上5行)「世、にあせすは」……  
 「あせすは」の下、墨の汚損。
- (12) 二六才6行(二〇四頁上21行)「くもまあれと」……  
 「く」は「ノ」のごとく書きさした上に重ね書き、  
 「も」字全部と「ま(字母・満)」の上部は擦り消しの上  
 上に書いたため、ややかすれている。

- (13) 二六才8行(二〇四頁上23行)「里にいて、」……  
 「里に」は擦り消しの上に書いている。

右には、まぎらわしい墨の汚損なども、実際に当該本をつぶさに確認して掲げておいた。これらのうち、擦り消しにかかわる例が(1)(2)(3)(6)(7)(10)(12)(13)の八箇所。いずれもおそらく、いったん書いた(あるいは書きさした)文字を鋭い刃物で紙面をこすって消した上に墨書しなおしたものと判断される。これらの例と奥書の「天文廿五年」の擦り消し・重ね書きの方法はほぼ同様であり、それに関わる問題とは不可分と見るべきであろう。本稿では問題点の指摘にとどめておく。なおこの擦り消しの問題は別稿において検討<sup>注4</sup>しなおす予定である。

### 三 『紫式部集大成』研究年表追補

『紫式部集大成』巻末の「紫式部・紫式部集研究年表」(以下、「研究年表」「年表」とカッコ付で略称する)は編者として三者の名をあげ、まえがきに「久保田・横井が追補をおこない、再編集した」とあるが、実は久保田孝夫の労作であることは言うまでもない。『紫式部集全評釈』(前掲)に南波浩の名義で収めた「紫式部・紫式部集文献目

録」以来、南波浩編『紫式部の方法——源氏物語・紫式部集・紫式部日記』巻末の「(同) 文献目録 補遺」を経て積み重ねたデータを整理したものである。横井は「太郎ソフトによる原稿ファイルをエクセル二〇〇七にコンバートして、『紫式部集』関係」と「紫式部関係」に大まかに分類したに過ぎない。したがって、まえがきは「久保田が大増補をおこない、横井が形式を変更した」と読まれることを期待したい。

ただ、このまえがきにあるように、この種のものには完璧を期しがたく、「補完」とはいいがたいものである。『紫式部集』関係」と「紫式部関係」の分類もおおよそのものであり、いずれとも決しがたい論考もすくなくない。たとえば、

野村精一「紫式部日記論——紫式部の表現空間——」(石川徹編『平安時代の作家と作品』武蔵野書院、1月)

のような論は、今回の「研究年表」には不採用(追補が必要)だが、題名からすれば「紫式部関係」の項に属するものの、実践女子大学本でいえば54・55・56番歌(岩波文庫本の55・56・57番歌に相当する)の「身」と「心」の思弁がみられる歌を論じたものであり、野村の別稿、

「紫式部とその『自然』——和泉式部批評をめぐって

——」(『日本文学』二二巻一〇号、一九七二年一月)(これも追補が必要)

「身」と「心」との相克——劈かれたる存在について」(学燈社『国文学』第二三巻九号、一九七八年7月) (『年表』四二四頁)

と内容が直結するため、『紫式部集』関係」に掲げても支障はない論ともいえる。紫式部その人、あるいはその作品を総合的に論ずるならば、截然と区切ることはむしろかしくなるはずだ。そもそもどのようなことであれ「分類」という行為自体が便宜的であるというのと、この際まったく同様なことが「研究年表」についてもいうことができる。

また、「研究文献一覧」ではなく「研究年表」という称を選択したのは、松村博司が『栄花物語の研究』(刀江書院、一九五六年一二月刊)に収めた詳細な「栄花物語研究史略年表」以来『栄花物語全注釈・別巻』(角川書店、一九八二年五月刊)所収「研究史年表」にいたるまで増補改訂を続けてきた、その形式を模したのである。松村のそれは「栄花物語記事」「関連事項」を区分し、「関連事項」は簡略なものにとどめるが、「栄花物語記事」には古記録の記事の引用もあって懇切なものであった。それにくらべて『紫式部集大成』の「年表」は文献の一覧のみ、しかも「紫式部関係」には『紫式部日記』関連の論考もあげてい

るが、その取捨の規準がやや判然としないこともあって、今後の継続的な追補・修正は必須である。

本稿では、もう一度松村の鞆みに倣って「年表」を年表たらしめる試みに手をつけることと、漏れた論考のうちで過眼の主なものを拾って後日に備えたいと思う。ただし、本稿では「『紫式部集』関係」と「紫式部関係」の区別をせずにあげておく。

\*

「紫式部・紫式部集研究年表」追補

長和 三（一〇一四）

紫式部没するか（岡一男・今井源衛説）<sup>注5</sup>。

寛仁 元（一〇一七）

平時通女・小少将の君、この後没か（萩谷朴説）<sup>注6</sup>。

寛仁 三（一〇一九）

紫式部没するか（萩谷朴説）<sup>注7</sup>。

長元 四（一〇三一）

この後、紫式部没するか（角田文衛説）<sup>注8</sup>。

承暦 二（一〇七八）

紫式部女・大式三位藤原賢子生存記録の最下限（四月三

〇日内裏後番歌合）<sup>注9</sup>。

応徳 三（一〇八六）

『後拾遺集』奏覧本完成<sup>注10</sup>。紫式部歌三首入集。

文治 三（一一八七）

『千載集』に紫式部歌九首入集。

建保 四（一二一六）

『新古今集』に紫式部歌一四首入集。<sup>注11</sup>

文暦 二（一二三五）

『新勅撰集』精撰本完成。紫式部歌四首入集。

建長 三（一二五二）

『後後撰集』奏覧本完成。紫式部歌三首入集。

文永 三（一二六六）

『後古今集』竟宴行われる。同集に紫式部歌七首入集。

弘安 元（一二七八）

『続拾遺集』奏覧本完成。紫式部歌三首入集。

正和 元（一二三二）

『玉葉集』完成。あるいは永仁元年（一二九三）撰進奏

覧されていたか。紫式部歌八首入集。

元応 元（一二三〇）

『続千載集』完成。紫式部歌一首入集。

正中 二（一二三六）

『後後拾遺集』完成。紫式部歌二首入集。

貞和 五（一二四九）

この年までに『風雅集』完成。紫式部歌一首入集。

延文 四（一二五九）

『新千載集』完成。紫式部歌四首入集。

貞治 三（一三六四）

『新拾遺集』完成。正保版本（一六四七年刊）などの流布本に紫式部歌一首入集。

延徳 二（一四九〇）

実践女子大学本『紫式部集』本奥書「本云／以京極黃門

定家卿筆証本不違／一字至于行賦字賦雙紙勢分／如本令書

写之于時延徳二年／十一月十日記之 癩老比丘判」

天文 八（一五三九）

松平文庫本など定家本系第二種（尊円本系）の諸本奥書

「……右書様者青蓮院尊円親王御自筆之故書／付之此一

冊者定家卿自筆之本也草子之寸／法書様以下似字形不違

一字如本写置加校合者／也此草子如之一丁面又三丁目之

面又草子之始面／裏押付候一丁以上四面者透写書之者也

透写之分／以上十一  
朱駁在之／面也／天文第八暮穰下旬廿九日注12」

天文二五（一五五六か）

実践女子大学本・第二次書写奥書「天文廿五年夾鐘上澣

書写之」

元和 六（一六二〇）

書陵部蔵桂宮本（也足叟素然本）校合奥書「元和六後臘

仲一以官本一校了注13」

元禄 九（一六九六）

富月堂秋田屋十兵衛より『紫式部家集』板行（四月八日付の序文あり）

元禄一〇（一六九七）

太宰府神社本（定家本系第四種）奥書「元禄十年卯月廿

三日貝原久兵衛殿如本書写申候」

享保 二（一七一七）

桃園文庫蔵享保本（雜纂本系）奥書「ウススミニテ外此

同本一冊写之但文字形体毫髮不違迷華之本書入薄墨を以

書之／享保二丁酉八月五日 以杉氏祐子本」

享保 八（一七二三）

桃園文庫蔵享保本・第二次奥書「享保八癸卯季十月初九

烏／倚長」

宝曆 七（一七五七）

桃園文庫蔵宝曆本（雜纂本系）奥書「宝曆七丁丑年夏四

月十一日／芙蓉散人 小高子仲濟」

明治二四（一八九一）

佐々木弘綱・信綱II標註「紫式部家集」（『日本歌学全

書・第三編』博文館、1月）

昭和 四（一九二九）

長連恒「紫式部集」（校註国歌大系・第12卷『三十六人

集全／六女家集全』国民図書、5月）

昭和四〇（一九六五）



池田亀鑑『宮廷女流日記文学』（至文堂、5月）

「紫式部日記と日記歌―附紫式部伝研究の参考書について―」

「紫式部日記における「心ばへ」なるものの先験的特質」

昭和四四（一九六九）

池田亀鑑『日記・和歌文学』（池田亀鑑選集、至文堂、

6月）

「紫式部日記とその精神」

「紫式部日記五節所の位置について」

昭和四五（一九七〇）

鬼東隆昭「実体験とその物語化―源氏物語・蜻蛉日記と紫式部日記の女郎花の歌の贈答をめぐって―」（『解

釈』1月）

昭和四六（一九七一）

岡一男『古典逍遙―文芸学試論―』（笠間書院、4月）

「紫式部没年新考」

「紫式部の伝記」

「紫式部の本名」

「紫式部本名藤原香子説への再吟味」

昭和四七（一九七二）

南波浩編『紫式部集 陽明文庫蔵』（笠間影印叢刊28、

笠間書院、9月）

日本文学協会『日本文学』紫式部日記特集、二二卷一〇号（10月）

中野幸一「『紫式部日記』の時間的構造―その回想と執筆時期について―」

小町谷照彦「『紫式部日記』の和歌」

野村精一「紫式部とその『自然』―和泉式部批評をめぐって―」（前掲）

昭和四八（一九七三）

秋山虔編『黒川本 紫日記（上・下）宮内庁書陵部蔵』

（笠間影印叢刊20・21、笠間書院、5月）

木下美「紫式部日記和歌一首「人にまだ折られぬものを誰かこのすきものぞとは口ならしけむ」の「人」について惟う」（九州大谷大『国語研究』12月）

昭和五〇（一九七五）

昭和五〇（一九七五）

上村悦子『王朝女流作家の研究』（笠間書院、2月）

「紫式部日記攷」

「歌人・紫式部／紫式部の歌」

昭和五九（一九八四）

角田文衛『紫式部の世界』（角田文衛著作集7、法蔵館、12月）

「若き日の紫式部」

「若紫の君」

「紫式部の伯母と従姉」

「紫式部の本名」

「紫式部の結婚」

「越路の紫式部」

「北山の『なにがし寺』」

「紫式部の居宅」

「紫式部と藤原保昌——「浅からず頼めたる男」の問題

」

「紫式部と女官の組織」

「道長と紫式部——「戸を叩く人」の問題——」

「土御門殿と紫式部」

「秋のけはひたつままに」

「ある夜の紫式部——宮廷における暗殺とクーデターの問題——」

「源典侍と紫式部——紫式部の性格をめぐる——」

「実資と紫式部——『小右記』寛仁三年正月五日条の解

釈——」

「紫式部と常陸国」

「紫式部の没年」

「紫式部の墓」

「紫式部の子孫」

平成 元（一九八九）

関根慶子『平安文学 人と作品とところどころ』（風間書房、12月）

「宮仕えにみられる二つのあり方——紫式部と孝標女

」

——「紫式部と同時代の女流文学者」

——「紫式部日記の美を探る——学生の古典鑑賞——」

——「紫式部の一首と源俊頼の一首と」

平成 三（一九九一）

増淵勝一『平安朝文学成立の研究 韻文編』（国研出版、4月）

「紫式部とその集」（紫式部官仕の年時について／紫式部の居宅）

平成 四（一九九二）

野村精一「紫式部日記論——紫式部の表現空間——」（石川

徹Ⅱ編『平安時代の作家と作品』武蔵野書院、1月）

（前掲）

平成 五（一九九三）

平田喜信「紫式部・清少納言と女歌」（『平安中期和歌考

論』新典社、5月）

平成 一〇（一九九八）

家郷隆文「紫式部集」（龍谷大学仏教文化研究所Ⅱ編

『四十人集・二』龍谷大学善本叢書18・思文閣出版、

3月)

平成一一(一九九九)

丸谷才一「神祇・紫式部」(『新々百人一首』新潮社、6月)

深澤三千男「へうき舟」の原風景―存在感覚の文学―

(『古代中世文学論考・第二集』新典社、6月)

平成一四(二〇〇二)

木村正中『中古文学論集・第四卷(土佐日記・和泉式部

日記・紫式部日記・更級日記)』(おうふう、7月)

「紫式部集冒頭歌の意義」

「浮きたる舟」

「紫式部の女房批評」

「紫式部と大齋院」

平成一六(二〇〇四)

石原昭平編『日記文学新論』(勉誠出版、3月)

永谷聡「『紫式部日記』における記録と憂愁の叙述―

少少将の君・大納言の君との贈答前後の記事をめぐって―」

ぐって―」

中野幸一「『紫式部日記』の欠脱部分」

平成二〇(二〇〇八)

畑裕子『源氏物語の近江を歩く』(近江旅の本、サンラ

イズ出版、3月)

田中新一『紫式部集新注』(新注和歌文学叢書、青簡舎、

4月)

#### 四 『紫式部集大成』正誤

『紫式部集大成』の制作についての経緯は同書の「序」と廣田收の「あとがき」に詳しいが、いささか補足しておきたい。

編者の三人の間では「紫式部集基礎資料集」作成の意図をもって、当初の目標を『紫式部集の研究 資料篇』という仮題を設定して作業をはじめた。二〇〇六年五月のことである。その書名(仮題)を設定した念頭に廣田・久保田の師匠・南波浩の南波浩『紫式部集の研究校異本研究篇』があったことは説明するまでもなからう。刊行が本年(二〇〇八)五月だから、作業開始からたった二箇年で上梓されたことになる。現今世間を賑わわせている「源氏物語千年紀」に間に合わせるといふ意図があったわけではないものの、たまたま二〇〇七年度に横井が一年間の国内研修を得たという私的な事情と、出版社に近い地域にいて編集実務のための打ち合わせをしやすい利便性があることを口実としたのだが、作業に関わる期間が限定されたこともあって、

二〇〇七年度後半の日程が急迫することになった。

かてて加えて、所収資料・原稿の増大によって仕上がり頁数が相当かさむことが予測されたこともあり、結局、検討を要する事項のいくつか——たとえば、所収三本統合の語彙索引、絵巻類の図版など——の掲載を見送る、といった予定変更があったことに忸怩たる思いがある、とは本稿冒頭に述べたとおりである。

さらに、時間の制約から、最終的に三人が鳩首協議して綿密な校正と検討をする機を得なかったこともある。そのため、かなりの訂正を要する箇所を生んでしまった。その責任の過半は横井にあると思われる。次に、編者の三人の目についた主な正誤を掲示して、責め的一端を塞ぎたい。本稿三節にも触れた「研究年表」の充実・追補も急務である。願わくは、さらに諸賢のご叱正を請う。

第二部 翻刻		頁数	段	行	誤	正
一九三	下	5			中に	中の
一九四	下	20			かきたへす	かきたえす
一九五	上	16			みやここひしも	みやこ、ひしも
一九六	下	9			三三三	三二(以下一九七頁上段「三八」まで一番ずつ繰り上げる)

第四部 基礎的研究		頁数	段	行	誤	正
二五〇	下	1			改行はそれぞれ本のままとする。	(削除)
二九九	上	11			右大臣	右大臣
二九九	上	11			兼盛か	兼盛が
三〇〇	上	4			披物語	彼物語
三〇〇	上	17			宮内少丞	宮内少丞
三〇〇	上	17			正月卅日	正月卅日
三〇〇	上	19			正月卅日	正月卅日
三〇〇	下	4			為時の方が	為時の方が
三〇〇	下	10			学曹のと	学曹と
三〇〇	下	13			大江道濟	道濟
三〇二	下	10			という、のは	というのは
三〇五	上	10			内容がか	内容が
三〇七	下	15			暦作成と	暦作成を
三〇七	下	18			寺社への宿泊に	寺社への宿泊を
二一〇	下	12			なきひとの	なき人の
二〇九	下	16			をれば	たれば
二〇八	上	16			みやここひしも	みやこ、ひしも
二〇七	下	20			かきたへす	かきたえす
二〇六	下	5			中に	中の
一九八	下	1			きしり	きしの
一九七	下	12			なきひとの	なき人の
一九六	下	16			をれば	たれば

四〇七	四〇七	第五部	三三三	上	5	う	「おしお」かよいあ	萩原	「おしお」が かよいあう
四〇七	四〇七	諸資料	三三二	下	13		ジの合致	萩原	ジと合致
		(研究年表)	三二六	上	25		「おいつしま」		「おいつしま」考
			三二六	上	20		『史料大成』二六一		『史料大成』二六一
			三二六	上	15		(一行アキ)		(削除)
			三二五	上	20		一、五 <small>キ</small>		一・五 <small>キ</small>
			三二五	上	14		以上のような		(一字下げ)
			三二五	上	10		近江の沖つ島		近江の海沖つ島
			三一六	下	13		だか		だか
			三一六	下	12		塩津といり		塩津という
			三一六	下	6		曇りて		曇りて
			三一四	下	3		磯といり地名		磯という地名
			三一三	上	7		これでは同じ		ここでは同じ
			三一三	上	17		後髪をひかおる		後髪をひかれる
			三一三	上	1		認めらる		認められる
			三一三	下	12		三尾か崎		三尾か崎
			三〇三	上	8		と湖西		湖西
			三〇八	下	14		安曇川河口の港であ り、現在の舟木崎)		安曇川河口(現在の 舟木崎)の湊であり、 湖西
							飯限が宿舎		飯屋が宿舎

四二六	四二六	上	20	三六号	三八号	生活していた	生活してゐた
四二六	四二六	上	12	三七号		富士御杖	富士谷御杖
四二六	四二六	上	11			若紫抄一	若紫抄一
四二六	四二六	上	9			源語作者	源語作者
四二六	四二六	上	5			清水好子「紫式部集 の編者」項目	(昭和四七年の項目 に移動する)
四二六	四二六	上	4			「紫式部日記全注 の編者」項目	『紫式部日記全注 に移動する』
四二六	四二六	上	2			「紫式部日記全注 の編者」項目	『紫式部日記全注 (下)』
四二四	四二四	上	1			身分(一)	身分(三)
四二二	四二二	西曆	11			一九七五	一九七四
四二二	四二二	下	11			身分(二)	身分(三)
四二二	四二二	西曆	2			一九七六	一九七五
四二二	四二二	西曆	2			一九七七	一九七六
四二二	四二二	西曆	1			紫式部の意匠一	紫式部の意匠一
四二二	四二二	西曆	1			一九七七	一九七六
四二四	四二四	上	2			中野幸一(以下五行)	(一字下げ)
四二六	四二六	上	4			地名一	地名一
四二六	四二六	上	5			三四号	一五卷一号
四二六	四二六	上	9			木船重昭「紫式部集 錯簡攷」(『中京大文 学部紀要』一五卷三 号、12月)	木船重昭「紫式部 集」解 釈 研 究 (二)「『中京大学文 学部紀要』一五卷二 号、11月)

あ と が き	四二七	上	20	南波浩「紫式部集」の基調」以下三行	(二字下げ)
	四二八	下	8	今井源衛「小右記」以下七行	(二字下げ)
	四二九	上	10	(一行アキ)	(削除)
	四三三	上	18	「紫式部の人となり考」日記・歌集を中心に」	「紫式部の人となり考」日記・歌集を中心に」
四三四	上	3	稲賀敬二「紫式部日記」と「日記歌」と「集」以下の項目六行	(二字下げ)	
四三四	下	2	日向一雅「紫式部日記論」(以下三行)	(二字下げ)	
四三九	上	13	秋山虔「紫式部の一生」(以下二行)	(二字下げ)	
四四二	下	15	安藤徹「読みの歴史」(以下三行)	(二字下げ)	
四四四	上	4	「紫式部の言葉」(源氏物語表現論」所収)」(風間書房	「紫式部の言葉」(源氏物語表現論」所収)」(風間書房	
四四七	上	4	東アジア」	東アジア」勉誠出版	
四五〇	上	9	一〇〇、号	一〇〇号、	

四五二	8	先生からいただいた	先生からご連絡をいただいた
-----	---	-----------	---------------

- 注1 南波浩II校注「紫式部集(付大式三位集・藤原惟規集)」(岩波文庫、一九七三年一〇月刊)。
- 2 南波浩「紫式部集の研究(校異篇/伝本研究篇)」(笠間書院、一九七二年九月刊)
- 3 横井「実践女子大学本『紫式部集』奥書考——年紀への疑惑をめぐって——」(『国語と国文学』第八四卷第一号、二〇〇七年一月)。
- 4 「実践女子大学本『紫式部集』の現状報告」(実践女子大学文芸資料研究所『年報』第二八号、二〇〇九年三月、予定)。
- 5 岡一男「源氏物語の基礎的研究」(東京堂出版、一九五四年初版、増訂版一九六九年八月刊)、今井源衛「晩年の紫式部」(初出一九六五年、『今井源衛著作集・第3巻』笠間書院、二〇〇三年七月刊、所収)
- 6 萩谷朴「紫式部日記全注釈・上巻」(角川書店、一九七一年一月刊)、一六二頁。
- 7 萩谷朴「紫式部日記全注釈・下巻」(角川書店、一九七三年三月刊)。
- 8 角田文衛「紫式部とその時代」(角川書店、一九六六年)

五月刊)。

9 萩谷朴『平安朝歌合大成<sup>増補</sup>・第三卷』(同朋舎出版、一

九九六年二月刊)、二〇三頁。

10 以下、勅撰集の成立経緯などについては『和歌大辞典』明治書店、一九八六年刊の記述による。

11 諸書、一四首中一首は他人作と表記する。すなわち卷

三夏歌・二〇四番「題しらず 紫式部」とする一首「たがさともとひもやくるとほと、ぎす心のかぎりまちぞわびにし」である。『和歌文学大事典』(明治書院、一九六

二年一月刊)卷末に収める勅撰作者部類は「紫式部集 紫式部への返歌」と誤記するのを祖述するものであり、

紫式部詠と見て間違いない。当該歌は実践女子大学本『紫式部集』では七九番。直前の七八番が詞書に「ひさしくをとつれぬ人をおもひいてたるをり」とあり、当該

歌の題詞が「返し」とあるので七八の返歌と誤解したのである。実践本を見れば明快なように、七九の直前には

四行分の空白があり、脱落があったことを示唆する。七九番歌は、おそらく男からの贈歌に対する式部の返歌であつたらう。「ほと、ぎす」が「とひもやくると」「まち

ぞわびにし」というのは、男の歌ではありえない。当該歌を夏歌の部立に収め「題しらず」としたのは『新古今集』編纂当時に、すでに『紫式部集』に脱落があつたか

否か、いま判断の材料が乏しい。後考を待ちたい。

12 『松平文庫影印叢書・第九卷・私家集編』(新典社、一九九七年一二月刊)。

13 以下の『紫式部集』諸本に関しては南波浩『紫式部集の研究<sup>校伝本研究篇</sup>』による。

(よこい たかし・実践女子大学教授)